Kanazawa University

金沢大学文学部論集　言語・文学篇
第25号　2005年　155～166

フェーロー語の属格とその代替表現の分布

入　江　浩　司

1　はじめに

フェーロー語はデンマーク領フェーロー諸島で話されるゲルマン系の言語（アイスランド語と最も近い系統的関係にある）であり、5万人弱の話者人口をもつ。この言語には名詞類の形態論的な格として主格・対格・与格・属格の4つがあるが、このうち普通名詞の属格は話し言葉からほとんど消失し、さまざまな前置詞句で置き換えられる傾向にあることが先行研究で指摘されている。しかし一方で、個人名など一部の名詞類には、従来の属格とは異なる新しい属格形（本稿では「SA所有格」と呼ぶ）が発達しており、先行研究ではその存在の指摘はあっても、名詞類の中での位置づけについては、これまであまり考えられてこなかった。

本稿では、(i) フェーロー語の属格に機能による形態的な二分化の傾向があること、(ii) いわゆる名詞句階層に沿った名詞類の分類を行なうことで、新しく生じた属格（SA所有格）を含めた意味的・機能的に関連した諸形の分布傾向をよりよく理解することができること、といった点を中心に論じる。

ここで、本稿の以下の構成を述べておく。まず2節で属格の形態の二分化傾向について述べ、次いで問題となる名詞類の形態の分布について、本稿で主張する二つの機能的区分、すなわち連体修飾成分として所有表現に現れる場合（3節）と、属格と結びつく前置詞の目的語として現れる場合（4節）とに分けて論じる。5節はまとめである。

2　機能による属格の形態の二分化

この節では、フェーロー語の名詞類が (i) 連体修飾成分として所有表現に現れる場合と、(ii) 属格と結びつく前置詞の目的語として現れる場合とで、使用される形態が二分化する傾向にあることを主張する。以下、人称代名詞（2.1）、固有名詞（2.2）、普通名詞（2.3）に分けて検討する。なお、名詞類の分類・整理の方法は、いわゆる名詞句階層の考え方を参考にしている（例えば、角田 1991: 39-61 を参照）。ただし、先行研究で提案されている階層による分類をそのまま当てはめるのではなく、フェーロー語の記述に合うように変更を加える。

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

2.1 人称代名詞

人称代名詞には、所有形容詞[1]をもつ類（1人称単数、2人称単数、3人称再帰）と、それをもたない類（1人称複数、2人称複数、3人称単数／複数）がある。所有形容詞は所有表現でしか用いられない。一方、この言語には属格と結びつく若干の前置詞があるが、この場合には所有形容詞ではなく属格が結びつく。所有形容詞を持たない類では、所有表現にも属格が用いられる。例 (1) と (2) の違いを参照：

(1) a. barn <u>mítt</u> 'child:sg.n.NOM my:sg.n.NOM'「私の子」[2] （所有形容詞）
b. koma til <u>mín</u> 'come to I:GEN'「私の所へ来る」 （代名詞の属格）

(2) a. barn <u>okkara</u> 'child:NOM we:GEN'「我々の子」 （代名詞の属格）
b. koma til <u>okkara</u> 'come to we:GEN'「我々の所へ来る」 （代名詞の属格）

1人称単数の (1) の場合、a では所有形容詞が、b では代名詞の属格が使用される。それに対して、1人称複数の (2) の場合、a b どちらの位置でも代名詞の属格が使用される（この類には所有形容詞は存在しない）。

代名詞には人称代名詞の他に、指示代名詞、疑問代名詞、不定代名詞と呼ばれるものがいくつかあるが、いずれも対応する所有形容詞をもたない。また、これらの代名詞には、属格の形が欠けていたりほとんど使われないものも多く、それぞれの代名詞ごとに事情は異なるようである。これらの調査は十分でないため、本稿では考察の対象から除外しておく。

2.2 固有名詞

固有名詞のうち人名（および一部の親族名称やペット名）には二つの属格形を持つものがあり、例えば Eivindur という男性名には (i) Eivindsa と (ii) Eivindar という二つの属格形がある。(i) は比較的新しく生じた属格形（名詞の曲用タイプの違いに関わらず接語的な -sa を付す）で、上記 (1a, 2a) に相当する所有表現でのみ使用され（ただし語順は異なる）、(ii) は本来の属格形で上記 (1a, 2a) に相当する位置でも、(1b, 2b) に相当する位置でも使用可能である。本稿では、(i) を「SA 所有格」と呼び、(ii) のような伝統的な属格形と区別する。(3) は男性名 Eivindur を用いた例である：

(3) a. <u>Eivindsa</u> bók 「アイヴィンドルの本」 （SA 所有格）
b. bók <u>Eivindar</u> 「アイヴィンドルの本」 （属格）
c. *koma til <u>Eivindsa</u> 「アイヴィンドルの所へ来る」 （SA 所有格）
d. koma til <u>Eivindar</u> 「アイヴィンドルの所へ来る」 （属格）

(3c) のように、SA 所有格を前置詞に後続する目的語とすることはできない。また、(3a, b, d) は、実際にはそれぞれ現れる文体的環境が大きく異なる。属格を用いた (3b) と (3d) は非常に書き言葉的であり、特に (3b) は話し言葉ではまず使用されない。(3d) に

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

ついては koma til Eivind（対格）の方が話し言葉では一般的である。一方、SA 所有格は極めて話し言葉的であり、書き言葉に SA 所有格が現れることは稀である。ただし、話し言葉でも、SA 所有格がそれほど頻繁に使用されるわけではないらしく、(3a) の SA 所有格よりも hjá「～宅で」という前置詞を用いた bók-in hjá Eivind(i) 'book-the at Eivindur:DAT'「アイヴィンドルの本」という表現の方が一般的である。

人名以外の固有名詞には、多くの場合、伝統的な属格しか存在しない。人名以外から形成される SA 所有格については 3 節で触れる。

2.3 普通名詞

普通名詞には一般に、伝統的な属格形しか存在せず、またそもそも話し言葉では普通名詞の属格は使用されなくなっているのであるが、使用された場合、所有表現では接尾辞定冠詞の付いた形（定形と呼ぶ）が、前置詞の目的語としてはそれが付かない形（不定形と呼ぶ）が現れる傾向がある：

(4) a. lands-ins stýri 'land:GEN-the:GEN government'「国の政権」[定形]（所有）
　　b. til lands　　'to land:GEN'「陸へ」[不定形]　　（前置詞の目的語）

書き言葉における属格の使用状況（15 人の異なる書き手による 24 作品のサンプルを資料とする）を調査した Hamre (1961) によると、他の名詞を修飾する成分として名詞の属格が使用された場合、97 例が定形（ないし何らかの修飾成分を伴うもの）、32 例が不定形であったという (ibid. 241)[3]。一方、前置詞 til の後に現れた属格名詞のうち、4 例が定形、230 例が不定形であったという (ibid. 237-238)。所有の属格としては名詞の定形が現れ、前置詞の目的語としては不定形が現れる傾向は、Thráinsson et al. (2004: 248 注) でも指摘されている。なお、til という前置詞は対格とも結びつくが、前置詞との結びつきについては 4 節で述べる。

普通名詞の属格が実際に使用されるのは、ほとんどが固まった表現においてである。連体修飾成分として現れている例（以下はすべて定形名詞）：*ársins tíð* 'time of the year', *landsins siður* 'customs of the country', *á mansins ævi* 'in a man's lifetime' (Hamre 1961: 231)。

2.4 この節のまとめ

以上のことから、名詞類のうち、人称代名詞（1sg, 2sg, 3 再帰）、固有名詞（人名）、普通名詞については、(i) 名詞類が連体修飾成分として所有表現に現れる場合と、(ii) 前置詞の目的語として現れる場合とで、使用される形態が分化する傾向があることがわかる。それぞれの場合の機能的な面に注目し、所有表現で連体修飾成分として使用可能な名詞類を「所有の属格」、前置詞の目的語として使用可能な名詞類を「目的語の属格」と呼んでおく。名詞類の種類ごとに、二つの機能的区分に対応して現れる形を整理すると、

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

表1のようになる。

所有形容詞とSA所有格は、「所有の属格」専用の形である。人称代名詞（1sg, 2sg, 3再帰）において、「所有の属格」と「目的語の属格」は明確に分かれている。固有名詞（人名）では、属格が「所有の属格」としても使用可能である。なお、普通名詞の定形・不定形の形態的区分と機能的区分に厳密な対応があるわけではなく、表ではこの境界を点線で示した。それ以外の名詞類では、二つの機能的区分に対応するような形態の分化はない。

表1　機能による属格の形態の二分化傾向

<table>
<tr><th rowspan="2"></th><th colspan="2">代名詞</th><th colspan="3">名詞</th></tr>
<tr><th>1sg, 2sg,
3再帰</th><th>1pl, 2pl,
3sg/pl</th><th colspan="2">固有名詞</th><th>普通名詞</th></tr>
<tr><th></th><th></th><th></th><th>人名</th><th>その他</th><th></th></tr>
<tr><td>所有の属格</td><td>所有形容詞</td><td rowspan="2">属格</td><td>SA所有格</td><td rowspan="2">属格</td><td>属格
（定形）</td></tr>
<tr><td>目的語の属格</td><td>属格</td><td colspan="2">属格</td><td>属格
（不定形）</td></tr>
</table>

3　所有表現における各形態の分布

前節では属格の機能的な二分化傾向を、名詞類を分類して大まかに整理した。しかし、名詞類の種類によっては伝統的な属格とSA所有格の両方が存在するなど、各形態の分布についてもう少し詳細に検討する必要がある。この節では所有表現を取り上げ、特にSA所有格の分布範囲を明確にし、所有形容詞、属格、それに前置詞による所有表現を合わせた全体の分布状況を明らかにすることを試みる。「目的語の属格」をめぐる問題は、4節で検討する。

3.1　SA所有格について

ここでは特にSA所有格について取り上げ、接語的要素 -sa の接続のしかた (3.1.1)、SA所有格が形成される名詞類 (3.1.2)、語順 (3.1.3) について触れておく。

3.1.1　接語的要素 -sa の接続のしかた

-sa という接語的要素は通常、強変化名詞の場合は語幹に、弱変化名詞の場合は斜格形に接続する。不変化名詞の場合はそのまま接続する（詳細は Lockwood 1977: 106, Staksberg 1996, Thráinsson et al. 2004: 64-65）：

(5)　Eivind<u>sa</u> bilur　「アイヴィンドル（男性名）の車」
（強変化男性名詞：NOM: Eivindur, ACC: Eivind, DAT: Eivindi, GEN: Eivindar）

(6)　Beintu<u>sa</u> bilur　「バインタ（女性名）の車」
（弱変化女性名詞：NOM: Beinta, ACC / DAT / GEN: Beintu）

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

(7) babbasa bilur 「お父さんの車」
(不変化男性名詞：babba「お父さん」)

主要語が前置詞句などで拡張された名詞句の一部となっている場合、主要語は主格のまま、名詞句の最後に -sa が接続する (Staksberg 1996: 29, Thráinsson et al. 2004: 64-65, 250)：

(8) Ólavur á Heyggi-sa hús 「[ヘッグルのオウラヴル] の家」
[Olavur:NOM at Heyggur:DAT]-sa house (Thráinsson et al. 2004: 250)
(Ólavur は男性名、Heyggur は地名)

Hjalmar P. Petersen（私信）によると、人称代名詞でも SA 所有格が聞かれることがあるという。その場合、代名詞の属格形に -sa が接続する：[4]

(9) { okkarasa / tykkarasa / teirrasa } bilur 「{我々の／あなた方の／彼らの} 車」

ただし、人称代名詞で SA 所有格の形成が容認可能であるのは (9) のように複数のみで、3 人称単数では容認可能性が落ち、1・2 人称代名詞（および所有形容詞）からの形成は全く容認されない。

3.1.2 SA 所有格が形成される名詞類

SA 所有格の形成は、基本的に人名と、人名に準じて使用される親族名称に限られる（例 5-8 を参照）。人名は外国人の名前を含めて、すべて SA 所有格の形成が可能である。人間以外の固有名詞では、ペット名も可能：

(10) Snarsa skál 「スネアル（雄犬の名）の鉢」 (Staksberg 1996: 28)

また、無生物を表わす固有名詞にも -sa の使用は広がりつつあるらしい：

(11) í Hotell Hafnia-sa tíð 「ホテル・ハフニアの時代に」
in [Hotel Hafnia]-sa time (Thráinsson et al. 2004: 64)

(12) New Yorksa taksabilar 「ニューヨークのタクシー」(Petersen 私信)

また、上記 (9) のように、人称代名詞の複数形にも現れることがある。しかし、普通名詞からは形成できない：

(13) *bilurin-sa lyktir 「車のライト」
car-the-sa lights (Staksberg 1996: 30, Thráinsson et al. 2004: 251)

3.1.3 語順

属格および所有代名詞は主要語の前にも後にも現れることが可能であるのに対し（後の方が無標）、SA 所有格は主要語の前にしか立たない（語順の詳細は Barnes and Weyhe

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

1994: 208, Stolz and Gorsemann 2001, Thráinsson et al. 2004 を参照）：

(14) a. okkara bilur 'we:GEN car' / bilur okkara 「我々の車」（属格）
b. Eivindsa bilur / *bilur Eivindsa「アイヴィンドルの車」（SA 所有格）

また、フェーロー語には属格（および対格）と結びつく前置詞として til「～へ向かって」, (í)millum「～の間で」, vegna「～の故に」などがあるが、このうち (í)millum と vegna は名詞類に後置されることもあり、その場合にのみ、SA 所有格を使用することが可能である（Thráinsson et al. 2004: 176-180, 251）。前置詞が先行する場合、いかなる種類の前置詞でも、SA 所有格は不可能である：

(15) a. okkara vegna / vegna okkara 「我々のために」（属格）
b. Eivindsa vegna / * vegna Eivindsa「アイヴィンドルのために」（SA 所有格）

3.2 前置詞句による所有表現

この言語の所有表現では、所有者と所有物の意味的関係の違いによって使用される表現が大きく異なる（詳細は Stolz and Gorsemann 2001, 入江 2004 を参照）。所有代名詞および代名詞の属格は、親族関係の表現において最も頻繁に使用される（例 16 および 17 を参照）。親族関係の表現でも、所有者が人名や人を表わす普通名詞の場合、hjá「～宅で」という前置詞を使用することの方が一般的である（例 18 および 19 を参照）：

(16) a. + pápi mín（所有代名詞） b. pápi-n hjá mær （前置詞句）
father my father-the at I:DAT 「私の父」

(17) a. + pápi okkara（代名詞属格） b. pápi-n hjá okkum （前置詞句）
father we:GEN father-the at we:DAT 「我々の父」

(18) a. [pápi Eivindar] （属格） b. Eivindsa pápi（SA 所有格）
father Eivindur:GEN Eivindur-sa father
c. + pápi-n hjá Eivind(i) （前置詞句）
father-the at Eivindur:DAT 「アイヴィンドルの父」

(19) a. [pápi drongs-ins] （属格） b. + pápi-n hjá drongi-num（前置詞句）
father boy-the:GEN father-the at boy-the:DAT「少年の父」

（それぞれのセットで最も一般的に使われるものを '+' で表示した。属格による表現は話し言葉ではまず使われないため、[ ] 内に入れた。）

なお、フェーロー語には、名詞類の対格が親族関係を表わす語に後置されて所有関係を表わす「所有の対格」とでも呼べる用法がある（Lockwood 1977: 103, Hamre 1961: 246, Thráinsson et al. 2004: 63 を参照）：

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

(20) a. pápi dreing-in
dad:NOM boy-the:ACC 「少年の父」

b. mamma gentu-na
mom:NOM girl-the:ACC 「少女の母」

c. beiggi Jógvan
brother:NOM Jógvan:ACC 「イェグヴァンの兄弟」

(Thráinsson et al. 2004: 63)

こうした「所有の対格」は、人名もしくは人間を表わす普通名詞でのみ可能であり、また、親族関係の表現にしか用いられない。ただし、「所有の対格」が可能な名詞類でも、(16)〜(19) に示したような hjá「〜宅で」という前置詞を使用することの方がより一般的である。

親族関係以外の所有表現においては、所有者を表わす名詞類の種類を問わず、前置詞句による表現が一般的であり、例えば全体・部分の関係を表すのに、所有者が有生性の高い名詞類の場合は hjá「〜宅で」という前置詞が（例 21, 22)、有生性の低い名詞類の場合は á「〜の上で」という前置詞が（例 23）使用される傾向がある：

(21) a. hond mín（所有代名詞）
hand my

b. + hond-in hjá mær（前置詞句）
hand-the at I:DAT

c. ? hond-in á mær（前置詞句）
hand-the on I:DAT 「私の手」

(22) a. [hond Eivindar]（属格）
hand Eivindur:GEN

b. Eivind-sa hond（SA 所有格）
Eivindur-sa hand

c. + hond-in hjá Eivind(i)（前置詞句）
hand-the at Eivindur:DAT

d. ? hond-in á Eivind(i)（前置詞句）
hand-the on Eivindur:DAT
「アイヴィンドルの手」

(23) a. [tak hús-ins]（属格）
roof house-the:GEN

b. * tak-ið hjá húsi-num（前置詞句）
roof-the at house-the:DAT

c. + tak-ið á húsi-num（前置詞句）
roof-the on house-the:DAT 「家の屋根」

なお、(21), (22) については、話者の世代により適格性の判断が異なるようで、ここでは比較的若い世代の話者の判断によった。比較的上の世代の話者には (21c), (22d) の方が普通の表現で、(21b), (22c) は奇異に感じられるようである。これについては、実際に世代による違いと言えるのかどうかも含めて、さらに調査が必要である。

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

3.3 この節のまとめ

所有表現において使用可能な所有形容詞、属格、SA 所有格の分布をまとめると、表 2 のようになる。名詞では前置詞句が使用される傾向にあることも示しているが、前置詞の種類は所有関係のありかたによって大きく異なる。親族表現にしか用いられない「所有の対格」（人名と人間を表す普通名詞でのみ可能）は、この表には含めなかった。

表 2　所有形容詞・属格・SA 所有格の分布（所有表現）

	人称代名詞			名詞			
	1sg, 2sg, 3 再帰	3sg	1pl, 2pl, 3pl	固有名詞			普通名詞
				人間	動物	無生物	
所有形容詞	←→						
属格		←———	———	- - - - - - - - - [前置詞句へ移行] - - - →			
SA 所有格			←- - - - ———	———	——— - - - - →		

（点線部分は、属格については話し言葉での使用が衰退している部分を、SA 所有格については広がりつつある周辺領域を示す。）

4　属格をとり得る前置詞と名詞類の格

すでに述べたように、フェーロー語には属格と結びつく前置詞として til「～へ向かって」, (í)millum「～の間で」, vegna「～の故に」などがあるが（詳細は Thráinsson et al. 2004: 176-180）、これらの前置詞は対格とも結びつく。ここでは、Hamre (1961) のデータに基づき、実例の数の多い til という前置詞を特に取り上げ、これと結びつく格形の分布について考察する（4.1）。次いで、実例の数が少ない millum について補足的に言及しておく（4.2）。なお、前置詞 til や (í)millum の場合、結びつく名詞類が属格か対格かで意味の違いはない。

4.1 前置詞 til「～へ向って」

Hamre (1961) による書き言葉の調査によると、前置詞 til「～へ向かって」と結びつく格形を、名詞類の種類に注目して整理すると、採取した例の実数は表 3 のようになったという。表 3 からは、人称代名詞では伝統的な属格が頻繁に使用される傾向が特に強く、名詞では人名や定形名詞の場合、対格の方が頻繁に使用される傾向が強いことがわかる。

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

表 3　前置詞 til と結びつく名詞類　　(Hamre 1961: 237 による)

	属格	対格
普通名詞（不定形）	230	126
普通名詞（定形ないし何らかの修飾成分があるもの）	4	221
人称代名詞	91	18
地名	57	38
人名	3	14
格形の特定できないもの	54	

Hamre (1961: 239) によると、対格で現れた人称代名詞 18 例には、hana (f.3sg.ACC) および tey (n.3pl.ACC) がそれぞれ 1 例、hann (m.3sg.ACC) および teir (m.3pl.ACC) がそれぞれ 2 例、tað (n.3sg.ACC) が 11 例含まれるという[5]。複数の人称代名詞については、1 人称や 2 人称でも対格が使用されることが Lockwood (1977: 92) で指摘されており、筆者の調査でも複数については全ての人称で対格の使用が可能であった。以上の分布傾向をまとめると、表 4 のようになる。

なお、フェーロー語はアイスランド語とは異なり、不定冠詞（形態は数詞の「1」と同じ）を発達させているが、ここでいう名詞の「不定形」とは、裸の名詞で現れる場合をいう。不定冠詞を伴った名詞は、修飾成分のあるものとして、定形名詞と同じ分類に入れている。不定冠詞のついた名詞は、通常、対格で現れる：

(24) Tey　　　komu　　til　<u>eina　　bygd</u>.
　　they:NOM　came:3pl　to　one:ACC　village:ACC
　　「彼らはある村にやって来た。」　　(Andreasen and Dahl 1997: 154)

表 4　前置詞 til の目的語

<table>
<tr><td rowspan="3"></td><td colspan="3">人称代名詞</td><td colspan="2">名詞</td></tr>
<tr><td rowspan="2">1sg, 2sg,
3 再帰</td><td rowspan="2">3sg</td><td rowspan="2">1pl, 2pl,
3pl</td><td>[固有名詞]
地名</td><td>[固有名詞]
人名</td></tr>
<tr><td>[普通名詞]
不定形</td><td>[普通名詞]
定形</td></tr>
<tr><td>属格</td><td colspan="5">←―――――――――――――――――――――― - - - - - - - - →</td></tr>
<tr><td>対格</td><td></td><td colspan="4">← - - - - - - - - - - - - - - - - - ――――――――→</td></tr>
</table>

表 4 で、いわゆる名詞句階層の配列とは異なる配列で整理したことについて、一言述べておく。人称代名詞に次いで属格で現れやすいのは、固有名詞では地名であり、普通名詞では不定形である。そもそも前置詞 til「～へ向って」は方向を表わすもので、こ

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

れと結びついて伝統的な属格が保たれるのは固定した表現においてであり、したがって、地名や普通名詞の不定形がこうした表現に多く含まれるのは自然であろう。なお、Hamre (1961: 238) は、「til + 属格」で現れたものの多くが副詞的な表現であると述べている：*til borðs* 'at table', *úti til havs* 'out at sea', *ganga til húsa* 'to go to the house (houses), go inside, go home', *til lands* 'to (on, by) land, ashore' 等。

4.2 前置詞 (í)millum「～の間で」

Hamre (1961) は、前置詞 (í)millum「～の間で」についても、属格と対格で現れた名詞の実数を挙げている。なお、この前置詞は名詞に後置されることもあり、その場合、先行する名詞はほとんど属格で現れる（表 5）。

表 5　前置詞 (í)millum と結びつく名詞類　　(Hamre 1961: 236 による)

(í)millum の位置		属格	対格
前置	普通名詞	7	112
	人称代名詞	15	4
	地名	5	5
	人名	1	5
後置	普通名詞	12	1
	代名詞	15	0

ここでは、前置詞 (í)millum が名詞に前置される場合のみを考察の対象とする。普通名詞の分類はなされておらず、不定形や定形の分布については不明である。ただ、Hamre (1961: 237) も述べているように、普通名詞の場合、対格で現れることが圧倒的に多いのが注目される。

対格で現れた人称代名詞の 4 例は、*ímillum teir* 'between them (m.3pl.ACC)', *ímillum okkum* 'between us (1pl.ACC)', *millum teir og okkum* 'between them (3pl.ACC) and us (1pl.ACC)', *millum tey bæði* 'between them (n.3pl.ACC) both' であったという (Hamre 1961: 236-237)。

4.1 で検討した前置詞 til「～へ向って」に比べると、例の実数が少ないため確実なことは言えないが、属格と対格の分布は til の場合とほぼ同じ傾向を示していると推定される。

先に述べたように、Hamre (1961) の研究は書き言葉の調査に基づくものであり、話し言葉における状況については、今後の詳細な調査が必要である。

5　おわりに

本稿では、フェーロー語の名詞類が、(i) 所有関係を表わす連体詞として使用される場合と、(ii) 属格と結びつくことのできる前置詞の目的語として使用される場合、とい

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

う二つの機能的区分にしたがって、形態が二分化する傾向があることを指摘した。その上で、いわゆる名詞句階層の考え方を取り入れた名詞類の分類を行ない、属格以外の諸形の分布を合わせて検討することにより、伝統的な属格が衰退している領域と、それに代わる形の出現傾向が理解しやすくなることを示した。

注

* 本稿は、平成14-16年度文部科学省科学研究費補助金(若手研究 (B)、課題番号14710371、研究課題「島嶼北ゲルマン語における前置詞表現の研究」) による研究成果の一部である。2003年9月および2004年9月に行なった現地調査において、フェーロー語話者として協力して頂いた Birgit Ørvarodd 氏、Finn Ørvarodd 氏、Hjalmar P. Petersen 氏に厚く謝意を表する。なお、本稿は日本言語学会第129回大会 (2004年11月20日・21日、富山大学) において「フェーロー語の二つの属格」と題して行なった口頭発表の原稿に加筆したものである。

1 所有形容詞は所有代名詞とも呼ばれ、それが修飾する主要部の名詞と性 (男性／女性／中性)・数 (単数／複数)・格の一致をして形容詞変化をする。

2 本稿で使用する略号は次の通り:NOM = nominative 主格, ACC = accusative 対格, DAT = dative 与格, GEN = genitive 属格, sg = singular 単数, pl = plural 複数, m = masculine 男性, f = feminine 女性, n = neuter 中性。

3 また、女性名詞の属格がほとんど使用されないということも指摘されている。

4 複数人称代名詞の格変化は次の通り:

1pl: NOM: vit, ACC / DAT: okkum, GEN: okkara

2pl: NOM: tit, ACC / DAT: tykkum, GEN: tykkara

3pl: NOM / ACC: teir (m.) / tær (f.) / tey (n), DAT: teimum, GEN: teirra

5 残りの1例は当該箇所の記述からは不明。

参考文献

Andreasen, Paulivar and Árni Dahl (1997) *Mállæra*. Tórshavn: Føroya Skúlabókagrunnur.

Barnes, Michael P. and Eivind Weyhe (1994) Faroese. In: E. König and J. van der Auwera (eds.). *The Germanic Languages*, 190-218. London: Routledge.

Hamre, Håkon (1961) The use of the genitive in Modern Faroese. *Scandinavian Studies* 33: 231-246.

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University

入江浩司 (2004)「フェーロー語の所有代名詞と所有の属格と所有関係を表わす前置詞について」『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』24: 13-27.

Lockwood, W.B. (1977) *An introduction to Modern Faroese.* 3. printing, Tórshavn: Føroya Skúlabókagrunnur.

Staksberg, Marius (1996) Sa-possessiv. *Málting* 18: 28-34.

Stolz, Thomas and Sabine Gorsemann (2001) Pronominal possession in Faroese and the parameters of alienability / inalienability. *Studies in Language* 25: 3, 557-599.

Thráinsson, Höskuldur, Hjalmar P. Petersen, Jógvan í Lon Jacobsen and Zakaris Svabo Hansen (2004) *Faroese: An overview and reference grammar.* Tórshavn: Føroya Fróðskaparfelag.

角田太作 (1991)『世界の言語と日本語』東京：くろしお出版.

NII-Electronic Library Service